

月刊
JMITU **平和な**

新型コロナ対応版



「世界の子ども平和像(東京)」から

8月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ グループ分会 2022年発行

No.452

秋闘・年末一時金要求準備 非正規との格差改善、成果主義はなくそう！

名ばかりの同一労働・ 同一賃金、非正規との 格差は拡大

今月夏季休暇を取った方が大半だと思えますが、正社員にとつてはうれしい休暇ですが、時間給で働いている、非正規の方たちにとつてはこの休暇が喜べない。なぜなら時間給なので働かなければ、収入が減ってしまう。

ただでさえ毎月の収入が正社員に比べて少ないのにますます生活が苦しくなる。正社員のように休暇を取っても給料が変わらないなんて夢のような話だ。

「ゴールデンウィークの時も

何がゴールデンだこっちは、収入がガタ落ちだ、どこかへ出かける金なんてない。」というのが現実です。

会社へアルバイトにも慶弔休暇をといた話をした時も、会社は「アルバイトの慶弔休暇については指摘されているポイントは分かるが、雇用区分役割等違うので全てが社員と同じようにはいかない。同一労働同一賃金で必要なものは過去に対応済み。会社としては考えていない。」

実際に職場を見ていて、正社員とアルバイトの業務がしっかり区分けされているだろうか？職場によっては、社員並みそれ以上の業務をこなし

ている人達はいないだろうか？正社員とそこまで変わらない業務をこなしているのに、正社員の待遇と差が大きすぎます。

会社は正社員登用制度があるので、上長が認めれば社員になれる。といいますながらも正社員の昇格と一緒に上長に気に入られなければ、不可能です。同一労働同一賃金、毎年非正規の待遇について要求を出しています。

今秋闘でも出していき、少しでも非正規の待遇を改善していきたいと思えます。

在宅勤務の問題

コロナの影響で在宅勤務がやむなく導入され、今や在宅で業務することに違和感を感じなくなってきましたが、

働く場所が自宅なので、業務時間外でもメール確認をするなど、仕事とプライベートの線引きが曖昧になってきていないでしょうか。

出勤していれば、声をかけるだけでできた情報共有なども在宅では相手の表情が見えないのでうまく情報共有できない。当然部下の評価など、結果だけでは評価されなくなってしまう、途中の苦労については伝わらない。

逆に職場に出勤しなければ業務をこなせない職場の人たちは、コロナのリスクを抱えながら出勤をしているのに、在宅手当のような手当が何も出ない。

こういった問題についても今秋闘にてかいしゃとこうしようしていきたいと思います。

仙洞田一彦

人は危機に直面しても、自分だけは大丈夫だと思うのだ。そう。コロナ感染症が蔓延していても、自分だけはおかしくないと思うのかもしれない。私はそういう人がうらやましい。たとえ後で感染したとしても、大丈夫と思えるだけでもうらやましい。

私の場合は、出掛ける時空模様を見て、降りそうもないなと思つて傘を持たずに出かけると、雨に降られる。逆に降りそうだなと思つて傘を持つて出ると、雨は降らないのだ。そういう経験が数限りなくあると、自分だけは大丈夫とは思えない。自分は駄目だ

と思つてしまう。

よく予感が当たったということを知ることが、私の場合も予感に当たる。しかし、当たるのはいつも悪い、不都合な方の予感だった。長靴を履いていくと雨は降らないし、足は重いし、傘も重い。同じ重さなのに雨が降つていればなんとも思わないのだが。こういう人生を長いこと送つてくると、いつも悲観的になる。当然、宝くじなど買わない。買ったつて当たらないと思つし、実際当たらないから、買うだけ無駄だと思つてしまう。宝くじ売り場に並べる人はうらやましい。買わなければ当たらないが、自分だけは当たると、少しだけでも思えるということは素晴らしい。それは希望だ。かなえられなくても希望

を持てるだけでもよい。

人生は攻めだなどとは思えない。人生は守りだ。少しでも雨が降りそうなら、少しくらい重くても傘は持つて行くし、雨靴も欠かせない。たとえ晴れてしまつても悔やまない。仕方ない。

コロナ流行が始まつて二年半以上経つが、私は感染してない。ワクチンをしっかりと打つたからかもしれないが、ワクチンを打つても罹らない

わけではない。軽く済むということだ。しかし、私は罹つていない。これは奇跡だ。

今年は梅雨がほとんどなくていきなり、三十五度越えの日が続いた。コロナより前に暑さにやられてしまふそうだった。それでも一ヶ月、何とか持ちこたえた。暑さでまい

っている時にコロナになつたら大変と、電気代も頭にあつたが、がんばつて冷房をつけてきた。そのかいあつてか、ここまで来た。

コロナにやられずに来たのは奇跡だ。私はひそかに思つていた。ただ、もしかすると罹つたが、ワクチンの効き目で、軽すぎて気が付かなかつたのかなと、頭の片隅では思つている。

流行が始まつたときは、私の命もこれまでかと思つていた。そういう人生だったから、仕方ない。ただ全く諦めてしまつたわけではない。誰もがやつているようにマスクをしたり、手の消毒をまめにしてきた。そうしてもなお、私の場合は不運の方に傾くのが常だった。不運だと思つるのは、

そういう人並みの注意を払っていても罹ってしまうからだ。しかし、コロナだけは違っていたようだ。今のところ大丈夫だ。このまま死なずに済めば、まさに奇跡。

だが懸念材料がもう一つある。ウクライナ戦争だ。流れ弾に当たるかもしれない。ウクライナで撃った弾が東京まで飛んできて、私に当たるということではない。台湾有事だ。ニュースを見聞きしていると、なぜか戦争を始めよう、始めようと煽っているような気がしてならない。煽っている人は、自分に弾が当たらないと思っている人だ。むかしむかしの日本の戦争だってそうだ。弾が当たっている人は私と同じレベルの人達だ。もしみんなが、自分にも弾が当たり、

爆弾が落ちて来るのだと冷静に思っていたら、ああまで悲惨にはならなかったのではと、当時の世相を知らない頭は考える。

ウクライナだって死ぬのは庶民レベルだ。一刻も早く止めなければならぬ。ウクライナの戦争は「えつ、ウソ」と思う位、簡単に始まったような印象がある。弾に当たったから、台湾の戦争が始まったことに気が付くなんてことにならないか、私は不安だ。「不安だ」「不安だ」と不安を口に出して言えば予感が外れてくれるかもしれないが、悪い予感は当たるのだ。予感を打ち消せばいいのだといっても、予感というのはどこからか湧いてくるから始末に負えない。

街に出ても、みんなが平気な顔をして暮らしているのが不思議なくらいだ。おそらく戦争が始まっても、自分には弾が当たらないと考えているせいだと思う。私の場合は弾が途中で向きを変えてでも、自分に向かってくる予感がするのだ。長い人生経験で、これは確信に近い。自分にだけは当たらないと考えている人がうらやましい。平静的日常が送れることがうらやましい。

コロナは今のところ奇跡だ。だが台湾問題までこの奇跡が持続できるだろうか。今、鉄筋コンクリート造りのアパートに住んでいるが、これがどれ程身を守ってくれるかは、ウクライナのばっくり割られたような建物の画像を見れば一目瞭然だ。戦争が

始まったらどこへ逃げるか。蒲田、大森に地下街はない。近いのは川崎だ。だが、深くはない。六本木駅だ。あそこは電車のホームまで幾つかのエスカレーターを乗り継いで降りる。かなり地下深くなので、強力なミサイルでも大丈夫かもしれない。

友人にそれを話したら、「ああ、いいかもしれないねえ」と、答えた。

もしかすると、みんな黙って何事もないようなふりをしていて、腹では六本木駅に逃げ込もうと思っっているのが多いかもしれないと思うと不安が増した。